

研 究 報 告

双子を出産した女性の母子健康手帳に対する認識

藤井美穂子¹, 佐藤 朝美²

Perception Regarding the Maternal and
Child Health Handbook of Mothers Who Gave Birth to Twins

Mihoko Fujii, Tomomi Sato

キーワード：双子，双胎妊娠，母子健康手帳，認識，生殖補助医療

key words : twins, twin pregnancy, Maternal and Child Health Handbook, perception, assisted reproductive technology (ART)

Abstract

Purpose: This study aimed to clarify how mothers who give birth to twins perceive the Maternal and Child Health Handbook.

Methods: Five mothers who had given birth to twins were interviewed using a semi-structured format. Data was analyzed by qualitative descriptive study.

Results: Results showed that these mothers who had given birth to twins, regarded the handbook as “evidence of their readiness to become mothers of twins,” “hope of becoming a good mother,” “something that should prevent anxiety related to having a high-risk pregnancy,” “a medical record that shows how the child is developing” and “they stopped using the handbook on their own.” Some mothers, the fact that the handbook’s fetal growth chart was for a single child strengthened the perception that their pregnancies were high risk. In addition, early hospitalization for monitoring during late pregnancy led to a lapse in the mothers’ awareness of the handbook as a personal tool.

Conclusion: In a twin pregnancy, it is important to try to reduce the mother’s anxiety by providing her with health-related guidance based on the physical indicators related to her health and to the health of her children. Moreover encourage twins mother to continue to use the handbook during early hospitalization for monitoring.

要 旨

目的：双子を出産した女性の母子健康手帳に対する認識を明らかにする。

方法：双子を出産した初産婦5名を対象に半構成的面接法を用いデータを収集した。質的記述的に分析し、母子健康手帳に対する認識を明らかにした。

受付日：2019年4月19日 受理日：2019年10月3日

1. 和洋女子大学 Wayo Women's University
2. 横浜市立大学 Yokohama City University

結果：母子健康手帳に対する認識について、【双子の母親となる覚悟の証】【母親となることの希望を与える手帳】【ハイリスク妊娠の不安による回避の対象】【子どもの経過を伝えるカルテ】【双子ゆえに躊躇する記録物】のテーマが見出された。双子を出産した女性は、手帳に記載されている単胎児用の発育曲線を見て、ハイリスク妊娠への不安を抱き、妊娠後期の管理入院によって母子健康手帳が私的所有物という認識は途絶えていることが明らかとなった。

結論：双胎妊娠に対応した母子の体重指標を用いた保健指導を実施し、妊娠中の不安軽減を図ることが重要である。また、管理入院中の母子健康手帳の活用を促す必要性が示唆された。

I. 緒言

母子健康手帳は、母子保健法により妊娠の届出をした者に対して交付され、妊娠・出産・育児に関する一貫した健康記録であり、かつ妊娠と乳幼児養育に関する行政情報、保健・育児情報が提供されるため、母子健康管理において重要である。近年では、必要な知識の提供や子育て記録、支援ツールとしての役割も期待されている（厚生労働省、2012）。

一方、児童福祉法では、出産後の養育について出産前から特に支援を要する妊婦を特定妊婦と定義し、児童虐待の観点から養育支援訪問事業を行っている。多胎妊娠は特定妊婦であり、妊娠期から継続的な特別な支援が必要である。母子健康手帳は、当事者や乳幼児の健康管理を促すことを基本的な考えとして配布され、当事者の自発的な健康管理を期待するものである（中島、2011, pp.515-525）。双胎妊娠した女性にとっても妊娠期から継続して母子健康手帳を活用することは、妊娠期より自身の身体に関心を持ち、自己健康管理していく上で重要である。

しかし、母子健康手帳に関する先行研究では、正常でない妊娠・出産の経過を辿る場合に母子健康手帳の記入に抵抗感を示す女性がいること（加藤、2008, pp.133-135）が明らかとなっている。現行の母子健康手帳は、単胎児に対応して作成されており、ハイリスク妊娠である双胎妊娠した女性にとって活用し難い可能性がある。母子健康手帳に関する先行研究のほとんどが実態調査であり（藤井、2017, pp.61-66）、母子健康手帳の通読・記入状況の活用や、行政などが独自に開発した補足版の手帳の評価は明らかとなっているが、双胎妊娠した女性及び双子を出産した女性に特化した支援を示唆する研究はほとんどない。そこで本研究では、双子を出産した女性を対象に妊娠期から今までの経過を振り返り、母子健康手帳に対する認識を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

A. 研究デザイン

質的記述的研究。

B. データ収集期間

2017年9月～2018年2月まで6か月間であった。

C. 研究参加者

研究参加者は、妊娠中及び出産後の経過に大きな異常がないこと、及び子どもに先天性疾患がなく、双子を出産後1～2年で研究協力が得られた女性5名程度であり、生殖補助医療は問わないとした。

D. データ収集方法

都内近郊で開催されている双子の母親たちのサークルにて、代表者に研究の趣旨を口頭と書面にて説明し、研究協力の意向がある人や研究内容に興味のある人に対して、書面に記した連絡先に連絡をいただくように説明した。連絡を受けた時点で研究連絡を取り日程を調整し、研究の目的、方法、倫理的配慮を口頭及び書面にて説明し同意を得た。

データは、半構成的面接によって収集した。インタビューガイドの内容は、外出時の活用頻度や、母子健康手帳に対して満足したこと及び期待することなどであった。インタビューを実施する日時と場所は、研究参加者の希望に合わせて設定した。面接内容は、研究参加者の承諾を得てICレコードとメモに記録した。

E. データ分析方法

本研究は、双子の母親の立場から妊娠期から出産後までの経過と共に変化する認識を捉えながら、母親がどのように母子健康手帳を認識し、活用しているのかを明らかにするためにグラウンデッドセオリーアプローチ（Strauss & Corbin, 1990/1999, pp.94-178；才木、2005, pp.55-148.）を参考に行った。

具体的な分析方法は、次の通りである。

①逐語録をもとに研究参加者ごとにデータを切片化してラベル名をつけた。

②それらをまとめ直し、概念を見出してコード化した。

③カテゴリー同士の関係性について、条件、文脈、行為、帰結を考慮しながら、軸足コーディングを行った。つまり、母子健康手帳の活用という行為に関連する思考や出来事などの現象を捉え、相違点や類似点に着目しながらサブカテゴリーとしてまとめた。

④5名の比較分析で全体像をつかんだ後にカテゴリーを体系的に関係づけて確認する選択的コーディングを行い、妊娠期、分娩期、産褥期の認識を連続的に捉え、双子を出産した女性の母子健康手帳に対する認識を明らかにした。

F. 妥当性の確保

本研究の参加者は、双子の育児に追われる母親達であった。外的妥当性を確認するために、5名のデータ分析終了後、育児が落ち着いた学童期の双子をもつ女性1名に対してもインタビューを実施し、双子の母子健康手帳への認識や活用状況の特徴を確認し、本研究で明らかとなった特徴が妥当であることを確認した。また、分析過程において双子の育児支援に精通している医療者に意見を求め、データの解釈や分析結果の妥当性を高めた。

G. 倫理的配慮

研究計画書は、和洋女子大学内の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した (No.1705)。母親には、研究依頼をする際に研究者の立場、研究目的、方法、研究の任意性、個人情報保護などについて口頭と文書にて説明を行った。双子を育児中の女性に調査することや研究参加者の私的な情報を扱う可能性があることから、研究参加者の体調やインタビュー中の子どもの安全とプライバシー保護に十分配慮した。

III. 結果

A. 研究参加者の概要

研究参加者の概要は表1に示す。年齢は、26～38歳 (平均32歳) のいずれも初産婦であった。分娩週数は妊娠30～37週であり、子どもの出生時体重は900～3,200g (平均2,250g) の初産婦5名であった。生殖補助医療 (Assisted Reproductive Technology; 以下ART) 後に双胎妊娠した女性は2名、一般不妊治療後に双胎妊娠した女性は1名であり、一卵性双生児1組、二卵性双生児4組であった。面接は、1回35～70分 (平均55分) であった。研究参加者の健診及び分娩施設は、5名中4名が周産期母子医療センターであった。最終学歴はほとんどが大学卒業者であり、読解記述力に差異はなかった。

B. 双子を出産した女性の母子健康手帳への認識

母子健康手帳の活用という行為に関連する思考や出来事などの現象を捉え、相違点や類似点に着目しながらコーディングを行い、17のサブカテゴリから5のカテゴリを見出した (表2)。本研究の双子を出産した女性が語った母子健康手帳に対する認識は時系列

で語られ、出産前、管理入院中、出産後の3時点に分類された (表3)。まず、3時点から明らかとなった双子を出産した女性の母子健康手帳への認識の特徴を記述し、その後に各カテゴリを説明する。

記述にあたっては、カテゴリ【 】, サブカテゴリ〈 〉で示した。

1. 双子を出産した女性の母子健康手帳への認識の特徴

双子を出産した女性は、妊娠期間中の管理入院の前まで【双子の母親となる覚悟の証】【母親となることの希望を与える手帳】といった認識を持ち、母子健康手帳を眺めたり母親となるイメージを抱いたりしながら活用していた。その一方で出産前から出産後まで継続して【ハイリスク妊娠の不安による回避の対象】【子どもの経過を伝えるカルテ】【双子ゆえに躊躇する記録物】といった認識もあった。

母子健康手帳の認識は、妊娠期間中の管理入院を機に母子健康手帳が看護師管理となったり、ハイリスク妊娠・出産に対する不安が高まったり、自分の出産に意識が向いたりすることで一時分断していた。出産後は、2人の育児に没頭するために手帳を開く時間がないなどの物理的な理由や、単胎児の発育曲線と双子の体重を比較して正常から逸脱していると思い、子どもの発達がハイリスクであることを自覚して不安を高めることから、【ハイリスク妊娠の不安による回避の対象】【子どもの経過を伝えるカルテ】【双子ゆえに躊躇する記録物】と認識する特徴があった。つまり、母子健康手帳に対する認識は、妊娠期から出産後の期間の中で変化するのではなく、妊娠中の管理入院によって出産への不安が高まったり、母子健康手帳が看護師管理となり手元に母子健康手帳が無かったりすることで手帳に対する認識が一時分断される特徴があった。また、妊娠期から出産後を通して子どもの経過を伝えるカルテである一方で回避の対象となる特徴が明らかとなった。

2. カテゴリの特徴の説明

本研究では、【母親となることの希望を与える手帳】【子どもの経過を伝えるカルテ】【ハイリスク妊娠の不安による回避の対象】【双子の母親となる覚悟の証】【双子ゆえに躊躇する記録物】の5つのカテゴリが見出された (表2)。以下、研究参加者の語りをゴシック

表1. 研究参加者の概要

事例	年齢	最終学歴	妊娠の成立	入院場所管理入院時期	出産週数	出生児体重 (第1子/第2子)	面接時の 子どもの年齢
A氏	20代後半	大学	自然妊娠	総合周産期母子医療センター (関東)/35週	36週	1,500g/2,300g	1歳0か月
B氏	30代後半	大学	生殖補助医療	総合周産期母子医療センター (九州)/32週	37週	2,800g/2,500g	1歳4か月
C氏	30代前半	専門学校	一般不妊治療	総合病院 (関東)/32週	37週	2,800g/2,500g	1歳5か月
D氏	30代後半	大学	自然妊娠	地域周産期母子医療センター (関東)/29週	37週	3,200g/2,600g	1歳3か月
E氏	30代後半	専門学校	生殖補助医療	総合周産期母子医療センター (関東)/29週	30週	1,600g/900g	2歳2か月

表2. 双子を出産した女性の母子健康手帳に対する認識

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
双子の母親となる覚悟の証	1. 実母から受け継がれる大事な記録物	実母から伝承される大事な手帳 受け継いでいく記念物 母親として保守すべき大切な手帳
	2. 緊急時の備えとして重要な保障	異常を把握するために活用する記録 子どもの成長に必要な情報源 いざとなった時に活用する重要な存在
母親となることの希望を与える手帳	3. 順調な妊娠経過を把握して安心を得る役割	妊娠経過が順調であることを確認する手帳 正常な経過を確認して安心を得る手帳
	4. 不安が漸減し母親となる希望が生起	記載によりこみ上げる母親となる喜び 順調な経過に意識を向けて気持ちを高揚させる手帳
	5. 子どもの成長をイメージ	記載することで母親となる希望の芽生え 子どもの成長イメージを与える手帳
ハイリスク妊娠の不安による回避の対象	6. 2児の体重差を確認して不安を再現させるもの	気になる記載された双子の体重差 体重の小さい児の成長への気がかり 自分で設定した「増えない方がよい」目標体重 リスクを考えないようにして不安を回避
	7. 単胎児のようにいかない双子の分娩様式や母子分離を想像させるもの	ハイリスク妊娠に気づき抱いた分娩様式に対する不安 低出生体重で生まれることを意識し高まる母子分離や母乳育児への不安
	8. 妊婦自身の体重増加に対する不安のきっかけ	妊婦の体重増加に対する矛盾する指導 双胎妊娠の体重増加基準が分からない不安 自分で行う体重管理への困惑 注意を逸らした妊娠中の体重管理
	9. 不妊治療時に抱いた不安が甦り記録を躊躇	不妊治療中に抱いた不安が持続 流産体験を想起して記録を躊躇 順調な経過に意識を集中
	10. 双子の成長差への不安のきっかけ	医師の説明通りに行かない双子の成長差 低出生体重児の発育への不安
子どもの経過を伝えるカルテ	11. 健診時に医療者が記載するための手帳	妊婦健診時に医療者が記入するツール
	12. 看護師が管理する手帳	切迫早産によって奪われた活用チャンス 管理入院によって看護師が管理する手帳
	13. 医療機関に正確な情報を与えるツール	妊娠経過を記す重要な手帳 出産状況と子どもの成長記録 子どもに必要な経過を医療者に伝えるために持ち歩く物 低出生体重児の正確な情報を医療機関に伝えるツール 出産後に使用する子どもの保険グッズの一部
双子ゆえに躊躇する記録物	14. 双子の位置が入れ替わり手帳の特定ができず記載を躊躇	2児の区別ができず記載への迷い どちらの子どもの手帳か迷い性別が分かってから記載を開始 活用方法が分からず記載を躊躇
	15. 平等に記録したいが二人分の記録を躊躇	平等に記載したいが2人分の記載が面倒
	16. 低出生体重児の評価を気にして記録を躊躇	正常曲線から逸脱した発達への偏見を気にして戸惑う記載 未熟児でネガティブな評価を受けることへの不安から記載を躊躇
	17. 双子の育児に没頭して記録できなかった後悔	2人分の記載する時間が取れない忙しい育児 2児の泣きに振り回され記載や閲覧する時間の無さ 子どもに「ちゃんと残せてあげられなかった」記録物

体で示し、発言後の()には語った参加者の符号とサブカテゴリー(表2)の番号を記し、各カテゴリーを説明する。

(a)【双子の母親となる覚悟の証】

【双子の母親となる覚悟の証】は、双胎妊娠というハイリスク妊娠を自覚して緊急事態に備え双子の母親となる覚悟とリスクを乗り越えて実母と同じように二人の母親として母子健康手帳を受け継いでいきたいという願いが込められたカテゴリーであった。【双子の

母親となる覚悟の証】は、〈実母から受け継がれる大事な記録物〉〈緊急時の備えとして重要な保障〉の2つのサブカテゴリーから構成されていた。

〈実母から受け継がれる大事な記録物〉は、自分が実母にしてもらったように母子健康手帳を大切な「記念」として受け継いで欲しいという願いを込めて大切に扱ったり、Eさんは「つながり」として継承したいという希望であった。

表3. 時期ごとのサブカテゴリ―

カテゴリ	出産前； サブカテゴリ	管理入院； サブカテゴリ	出産後； サブカテゴリ
双子の母親となる覚悟の証	実母から受け継がれる大事な記録物 緊急時の備えとして重要な保障		
母親となることの 希望を与える手帳	順調な妊娠経過を把握して安心を得る役割 不安が漸減し母親となる希望が生起 子どもの成長をイメージ		
ハイリスク妊娠の 不安による回避の対象	2児の体重差を確認して不安を再現させるもの 単胎児のようにいかない双子の分娩様式や母子 分離を想像させるもの 妊婦自身の体重増加に対する不安のきっかけ 不妊治療時に抱いた不安が甦り記録を躊躇		双子の成長差への不安きっかけ
子どもの経過を伝えるカルテ	健診時に医療者が記載するための手帳	看護師が管理する手帳	医療機関に正確な情報を与えるツール
双子ゆえに躊躇する記録物	双子の位置が入れ替わり手帳の特定ができず記 載を躊躇 平等に記録したいが二人分の記録を躊躇		低出生体重児の評価を気にして記録を躊躇 双子の育児に没頭して記録できなかった後悔

へその緒とかもちゃんと持っててくれたんです…
(中略) …お母さんが(母子健康手帳)持ってて
くれて…(中略) …自分の手帳はつながりみたい
な感じ…(中略) …この子達にはちゃんと残して
あげたいと思って(C1)

〈緊急時の備えとして重要な保障〉とは、双胎妊娠
により何があるか分からないというリスクに備える保
障であった。第1子が胎児発育不全の疑いのあったA
さんは、妊娠中から出産後まで基本的にいつも母子健
康手帳を持ち歩き緊急時に備えていた。

何か子供たちに急変が起こったり、例えば事故と
かそういうことが起こったときに私に意識がある
かどうか分からないので、この子達自体がまあ双
子ってこともあってちょっと小さく生まれている
ので、だからと言って何か健康上に問題があるわ
けではないんですが、医療機関の方に一番正確な
情報が行くのは母子健康手帳だと思っているので
携帯するようにしています。(A2)

(b)【母親となることの希望を与える手帳】

【母親となることの希望を与える手帳】は、流産す
るのではないかという不安を解き放ち母親となること
への希望を生起させる手帳であり、〈順調な妊娠経過
を把握して安心を得る役割〉〈不安が漸減し母親とな
る希望が生起〉〈子どもの成長をイメージ〉の3つの
サブカテゴリから構成されていた。このカテゴリ
は、不妊治療中に流産した児の母子健康手帳を読み
返し辛かった体験をもつBさんから抽出されたカテ
ゴリーであった。

〈順調な妊娠経過を把握して安心を得る役割〉とは、
母子健康手帳に記載される妊娠経過の欄が増えていく
ことで、流産した時期を過ぎて安定期に入ったことを

自覚して安心を得ていくことであった。〈不安が漸減
し母親となる希望が生起〉とは、母子健康手帳の記載
欄が増えていくことで徐々に母親になれるという気持
ちが芽生えていくことであった。

(母親になれる) 希望が湧いてきたので、これ
(記録)が残るじゃないですか、子どもが大きくな
っても、あー記録として残せるって、なんて
言ったらいいのかな、順調にいったらいいなっ
ていう気持ちと一緒にこう歩んでいける(B4)

〈子どもの成長をイメージ〉は、母子健康手帳を眺
めることで二人の成長を想像することであった。Bさ
んは、二人の子どもと遊ぶ姿を想像して双子の母親と
なることを実感していった。

ちょっと先をみたときに希望が湧いてくるページ
でもあったなって思って…(中略) …今後の楽し
みですよ、歩けるようになったときに一緒に遊
んでいるっていうイメージですかね。…(中略)
…しかもそれ(手帳)が2つもあるっていう、な
んて言うか嬉しいっていうか誇らしいっていうか
ね(B5)

(c)【ハイリスク妊娠の不安による回避の対象】

【ハイリスク妊娠の不安による回避の対象】は、ハ
イリスクであることを意識させられるために活用を
避ける対象のことであり、出産前の〈2児の体重差を
確認して不安を再現させるもの〉〈単胎児のようにい
かない双子の分娩様式や母子分離を想像させるもの〉
〈妊婦自身の体重増加に対する不安のきっかけ〉〈不妊
治療時に抱いた不安が甦り記録を躊躇〉と、出産後の
〈双子の成長差への不安のきっかけ〉の5つのサブカ
テゴリで構成されていた。

例えば〈2児の体重差を確認して不安を再現させるもの〉とは、母子健康手帳に記入された体重と単胎児用の発育曲線を比較して、小さめの胎児の発育を気にかけ、手帳をみる度にその不安が再現することであった。

ドクターから問題ないですよって言われて安心してても、前と比べて、こっちが小さかったので大丈夫かな、大きくなるかなって、推定体重見て気になりました (D6)

〈単胎児のようにいかない双子の分娩様式や母子分離を想像させるもの〉とは、2児の体重差が自分の分娩様式や母子分離となるかどうか、一緒に退院できるかどうか、希望する母乳育児ができるかどうかなどの今後の育児にも影響するものであり、単胎児のようにいかない不安を想起させることであった。

〈妊婦自身の体重増加に対する不安のきっかけ〉は、子どもの体重増加に関連して母子健康手帳に記載される妊婦自身の体重管理に対して気がかりのことであった。双子を出産した女性は、全員が妊娠期を想起して妊娠中に増えていく自分の体重に対して、医療スタッフから具体的な体重管理指導がないことや、指導内容が矛盾していたことで不安を抱いていた。

一般的な育児書とか本とか1か月に1キロとか、単胎の目安しか書いてないんですけど、双子だとどれくらい分からなくて、体重はどんどん増えちゃうし、これでいいの心配でした… (中略) …双子だからプラス2キロくらいとか勝手に考えて、そうするとプラス10キロなんて途中で簡単にいってしまったので、高血圧になってこの子らに影響してしまうんじゃないかってすごく心配しました (D8)

〈不妊治療時に抱いた不安が甦り記録を躊躇〉とは、双胎妊娠に対して不安を抱く際に不妊治療中に流産した体験が甦り、不安を回避するために母子健康手帳を活用しないことであった。

妊娠中に不安だったので記録してもダメだった (流産) 場合に、振り返った場合になんかそれを読み返してなんか悲しくなったりするの… (中略) … (母子健康手帳に) 付けてたやつを見てちょっと悲しかったから (B9)

〈双子の成長差への不安のきっかけ〉とは、出産後の体重差が不安のきっかけとなることであった。例えば胎児に体重差があったEさんにとって母子健康手帳は、出産後も不安を助長するものであり、注意を逸ら

したくて活用していなかった。

リスクとか考えないようにしてて、自分は大丈夫って… (中略) …結構 (体重差) 気にしてて、全然、見てないです。一卵性はリスクが特に高いって言われてたから (E10)

(d)【子どもの経過を伝えるカルテ】

【子どもの経過を伝えるカルテ】は、双子の経過を医療者に伝えるためのカルテのことであり、出産前の〈健診時に医療者が記載するための手帳〉管理入院時に抱いた〈看護師が管理する手帳〉、出産後の〈医療機関に正確な情報を与えるツール〉の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

例えば〈健診時に医療者が記載するための手帳〉とは、ハイリスク妊娠である双胎の妊婦健診時に医療者が記載するツールのことであった。

付けるだけでもね、(医療者が)付けて渡すだけのツールですよ。母子手帳の使い方を聞く、それもなかったです… (中略) …使い方があって教えてもらえればね、もっと使おうかって気持ちになるし、もっと書こうかなって思うので、助産師さんたちちゃんと書いてるかチェックされてますよね、パラパラってね。 (B11)

また、〈看護師が管理する手帳〉とは、看護師が管理する手帳のことであった。双子を出産した女性達は、妊娠29週から妊娠35週の間全員が管理入院を体験していた。母子健康手帳は、入院時に診察券と一緒にナースステーションに提出され「ナース管理」となった。入院中の健診後に一旦手元に戻された女性もいたが、ハイリスク出産に意識が向かい母子健康手帳を入院中にどうしていたか「記憶がない」と語り、管理入院によって母子健康手帳を主体的に活用する機会が奪われていた。

〈医療機関に正確な情報を与えるツール〉は、健康な双子を出産した後も低出生体重児として生まれた我が子の発育が気がかりで、何かあったときのために妊娠経過から継続的な情報を正確に医療機関に伝える記録のことであった。

この子達自体がまあ、双子ってこともあってちょっと小さく生まれているので、だからと言って何か健康上に問題があるわけではないんですが、医療機関の方に一番正確な情報が行くのは母子健康手帳だと思っているので携帯するようにしています… (中略) …受診票とか挟んでまとめてこうしてるのでバラバラにならないように私、医療セットみたいに医療機関に通うセットみたいに

なってるんで今、一緒にセットの一部 (A13)

(e)【双子ゆえに躊躇する記録物】

【双子ゆえに躊躇する記録物】は、手帳の対象となる児が不確実であることや記載する時間が無いなどの物理的な理由や、否定的な評価となることを懸念して活用を躊躇する記録物であった。【双子ゆえに躊躇する記録物】は、出産前の〈双子の位置が入れ替わり手帳の特定ができず記載を躊躇〉〈平等に記録したいが二人分の記録を躊躇〉と、出産後の〈低出生体重児の評価を気にして記録を躊躇〉〈双子の育児に没頭して記録できなかった後悔〉の4つのサブカテゴリで構成されていた。

〈双子の位置が入れ替わり手帳の特定ができず記載を躊躇〉とは、母子健康手帳の対象の胎児が不確実であり記録を躊躇することであった。例えばCさんは、妊娠16週以降に性差の違いが判明したことで母子健康手帳の対象の胎児が確実となり、記入しようと思うようになっていた。

双子ならではの、あ、まず、妊娠中はどっちが第1子か分からない。最初のうちは、で、性別が分かったのであのー第1子がこっちだって書くようにはなった (C14)

〈平等に記録したいが二人分の記録を躊躇〉とは、平等に記載したいが2人分の母子健康手帳の記載の仕方が分からずに躊躇うことであった。例えばAさんは、2冊の母子健康手帳に母親としての気持ちをどのように記入したらよいかを躊躇っていた。

例えばお母さんが気持ちを書きましょうっていうところがあるんですけど、二人に対してまだ生まれてないので、同じことを書くべきなのか、それともそれぞれに対する気持ちというか書くべきなのかとか、2冊見比べてこっちはこうこっちはこうっていうのはめんどくさいなって思ったり (A15)

出産後は、〈低出生体重児の評価を気にして記録を躊躇〉、つまり単胎児の基準が示されている母子健康手帳を見て、低出生体重児として生まれた双子に偏見が向かうことを心配したり、自責の念を抱いたりすることで記載を躊躇していた。

一時保育の登録でやはり母子健康手帳の提出を求められて出したんですね。… (中略) …特に小さく生まれて今の正常曲線にはのっていない (入っていない) ので。例えば知らない人から見たら、ちょっとちっちゃいなーこの子って思われるこ

とが多いので、これを見てチェックされるのではないかって、そういうマイナスな気持ちになる… (中略) …どうしても単胎として記録用に作られているので、こう未熟児じゃないですけど、そういう印象になってしまうんじゃないかと、やはり正常な曲線にのらない (入らない) っていうことで自分を責めてしまったりとか、あまり知らない方からすると、ちょっと発育が遅いわじゃないんですけど、そういうイメージになってしまうんじゃないかっていう心配はあります。 (A16)

〈双子の育児に没頭して記録できなかった後悔〉とは、二人の育児に追われ記録できなかった後悔であった。例えば、子どもが低出生体重児だったEさんは、退院後に双子の授乳に没頭して母子健康手帳に全く記入していないことを後悔していた。

ちゃんと残してあげたいと思ってたんですけどできなかった。忙しくて、なんか育児日記とかかけこうつけている人いるじゃないですか。やろうって思ったんですけど無理でした。この子たち、おっぱい全然吸ってくれなかったから (E17)

IV. 考察

母子健康手帳の交付・活用の手引きでは、母子健康手帳が妊娠期から乳幼児まで一貫した健康の記録であり、医療関係者が記載・参照するものである一方で、保護者自らも記載して管理できるよう工夫された母子保健ツールであることが明記されている (厚生労働省, 2012)。しかし本研究では、ハイリスク妊娠・出産の不安によって医療者が記載・参照する手帳という認識が強く、現状の母子健康手帳が主体的に活用されていないことが明らかとなった。母子健康手帳の活用を促し、母親となる過程を支えるために必要な助産師の支援に着目して考察を述べる。

A. 母子健康手帳の活用

双胎妊娠は、子どもの虐待ハイリスクであり、妊娠期から育児期までの切れ目のない支援が求められる。切れ目のない支援を実施するためにも妊娠期からの母子健康手帳の活用は重要である。しかし本研究の参加者は、〈母親から受け継がれる大事な記録物〉〈緊急時の備えとして重要な保障〉として母子健康手帳の重要性は認識しているが、【子どもの経過を伝えるカルテ】であり、積極的に活用していなかった。その理由として、単胎児と双胎児は発育や出生時期の相違があるが、健診時に単胎児の胎児発育曲線や身体体重曲線が指標として掲示された母子健康手帳を用いて指導さ

れることが影響していると考えられる。例えば、単胎妊娠の場合は妊娠40週で正期産となるが、双胎妊娠の場合は妊娠36週～37週で約7割が出産となり、2200g～2300gが平均出生体重である（大木, 2017, p.8）。そのため、双胎児の平均出生体重や成長曲線を活用して指導する必要があるが、単胎児用の成長曲線を用いた指導により、低出生体重児に対する不安が高まり、自らの手帳としての意識が低下して活用されていなかったと考える。双胎妊娠した女性が、これからどのように胎児が発達発育していくのか指標となる胎児及び乳児発育曲線が示されている「ふたご手帖記録ノート」などの副読本の活用と活用方法の指導を行っていくことが必要である。特に本研究では、管理入院によって、母子健康手帳に対する認識が分断されていることが明らかとなった。管理入院中に母親の思いを自由に記載することを促進したり、出産後の活用方法などを紹介したりすることで切れ目のない継続的な母子健康手帳の活用が期待できる。

また、多胎児を出産した女性は、出産前に子育てのイメージがつかないことに悩んでおり、出産後は子育ての実践や解決に悩みを感じていることが明らかになっている（藤原・藤原・須山, 2004, pp.137-139）。本研究の参加者である生殖補助医療後に双子を出産した女性は、妊娠後期になり医療機関での記載が増えることで、母親となり子どもと遊んでいる姿をイメージすることができていた。出産前に親となることをより具体的にイメージできた女性は、イメージできなかった女性より出産後に母親としてよりよく順応していたことが報告されている（Pancer, Pratt, Hunsberger, et al., 2000, pp.253-278）。双胎妊娠した女性が、母親となる自分自身の生活を妊娠期からイメージして、母親となる準備をしていくために、母子健康手帳の交付時や病産院での助産師の保健指導時に母子健康手帳の活用方法を促していく必要がある。

B. 双胎妊娠した母親の体重管理

本研究では、双子を出産した女性にとって母子健康手帳は【双子ゆえに躊躇する記録物】【ハイリスク妊娠の不安による回避の対象】であることが明らかとなった。この不安を軽減させて、保護者が自ら記載管理するという意識に向かうよう支援する必要がある。

双子を出産した女性は、医療者より双胎妊娠のリスクについて説明を受けて、特に胎児の体重増加への不安が高まり、それに関連して母体自身の体重増加に関心を抱いていた。しかし、双胎妊娠した母体の体重増加に対する情報提供が行われず、不確かな状況で自己管理を行っていることでより双胎妊娠の体重に対する不安が高まっていたと考える。

妊婦の体重に関する指標は、日本産婦人科学会周産期委員会、厚生労働省「健やか親子21」、日本肥満学会肥満症診断基準など、異なる妊娠中の体重増加の

推奨値が存在する。それぞれの推奨値は、妊娠中毒症（妊娠高血圧症候群）予防、適正な出生体重、産科的異常を減少させるなどの目的によって指標が異なっている。母子健康手帳に記載されているのは、厚生労働省が提示した「妊産婦のための食生活指針」に則り、若い女性のやせの増加や低出生体重児の増加といった状況を鑑み、適切な出生体重と各種分娩異常との関連を考慮した“至適体重増加チャート”である。妊婦の体重増加に関しては、体格評価の基準や体重増加の推奨値に関して統一した見解がなく、日本産婦人科診療ガイドラインでは目的が異なる複数の妊娠中体重増加量の推奨値の存在を認識する必要性が指摘されている（日本産科婦人科学会・日本産婦人科医会, 2017, p.53）。

また、助産所開業マニュアルには至適体重増加チャートが記載され、肥満妊婦に関しては5kg程度の増加を目安とする基準が明記されている（日本助産師会, 2013, p.76）。一方、助産師が活用する助産業務ガイドライン2014には、妊婦の体重増加や体重指導に関する記載はない。このように妊婦に体重指導を行う医療職が活用する妊娠中の推奨体重増加量に関する指針は、複数存在し、個別性を考慮した指標が一般的である。双胎妊娠の推奨体重増加に関しては、いくつかの指標があるが（鈴木・大内・松橋, 2007, pp.933-937；正本・伊志嶺・知花他, 2006, pp.337-343）、日本人のデータを用いた推奨値は存在せず、海外の示した推奨値を用いている施設もあり（国立成育医療研究センター, 2018）、医療施設ごとで異なる指導が行われている可能性がある。

母体の体重増加は、妊娠高血圧症候群などの発症と関連することが明らかとなっており（横山・清水, 1999, pp.604-615）、臨床現場ではハイリスク妊婦に対する注意喚起が行われているが、実際の双胎妊娠した女性への推奨体重指標が明確ではなく、指導が十分に行われていない。妊婦の体重増加は、低出生体重児の出生に関連があり（笹田・岩田・河口, 2010, pp.92-98）、低出生体重児は生活習慣病を含めた成人病の発症リスクが高まるため（Barker D., 2003/2005, pp.62-68）、妊娠中の体重が自己管理できるよう指導していくことが重要である。特に早産率の高い双胎妊婦に対しては、体重増加の推奨値を明らかにして、適切な体重管理を行い、妊娠中からセルフケアができるような支援が必要である。

V. 結論

昨今の産科医師不足や産科施設の減少、ハイリスク妊婦や児童虐待の増加に伴い、安心して妊娠から子育てまでの移行期における支援が注目されている。母親となっていく移行期に妊婦自身の健康への意識やセル

フケア能力を高めるために母子健康手帳の活用は重要であり、特定妊婦に対応した母子健康手帳の副読本などの普及と活用が期待される。

本研究では、妊娠初期は母子健康手帳の記載を躊躇すること、妊娠後期は管理入院によって医療者の手帳という認識が高まることが明らかとなった。つまり、妊娠中期以降より母子健康手帳の具体的な活用方法を伝え母親が自己管理できるような支援が必要である。また、出産後は、単胎児用の身体発育曲線で双子の発育が評価されないように、双子用の身体発育曲線の普及が望まれる。

今回の研究では、父親の思いを含めて女性の抱く認識を明らかにできなかった。母子健康手帳は保護者の手帳であり、母親の認識には父親の思いや関わりも影響していることが推測できる。今後は、父親の認識を含めて母子健康手帳の認識を明らかにすることが課題である。

謝辞

本研究にご協力いただきました研究参加者の皆様、ご助言をいただきました石川県立看護大学の大本秀一教授に心より感謝申し上げます。また、本研究結果の一部は第19回日本赤十字看護学会学術集会にて紙面発表した。尚、本研究は和洋女子大学の研究奨励費(2017年度)の助成を受けて実施した。

利益相反

本論文内容に関連し、開示すべき利益相反の事項はない。

文献

Barker, D. (2003)／福岡秀興 (2005). 胎内で成人病は始まっている—母親の正しい食生活が子どもを未来の病気から守る. 東京：ソニー・マガジンズ.
藤井美穂子 (2017). 母子健康手帳の活用の現状と課題についての文献検討. 日本赤十字看護学会誌, 17(1), 61-66.
藤原由美子・藤原由美・須山由梨子 (2004). 多胎児をもつ母親の育児に関する産前・産後の悩み事—子育て中の母親の意見から—. 日本看護学会論文集：母性看護, 35, 137-139.
加藤千恵子 (2008). 4カ月健診を経過した育児期の母子健康手帳の活用状況と世代間活用. 日本看護学

会論文集：母性看護, 38, 133-135.

国立成育医療研究センター. 多胎妊娠外来妊娠中の体重増加量, <https://www.ncchd.go.jp/hospital/pregnancy/senmon/tatai.html> (2018.5.5).

厚生労働省 (2012). 母子健康手帳の交付・活用の手引き. http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/boshi-hoken/kenkou-04.html (2018.5.5).

正本 仁・伊志嶺梢・知花美紀・上原博之・伊是名博之・城間 肇・吉秋 研・佐々本薫・金澤浩二 (2006). 双胎妊娠—母体妊娠前BMI, 妊娠中体重増加率と児出生体重との相関. 臨床婦人科産科, 60(3), 337-343.

中島正夫 (2011). 妊産婦と乳幼児の健康を支援する手帳制度の変遷と公衆衛生行政上の意義について. 日本公衆衛生雑誌, 58(7), 515-525.

日本助産師会 (2013). 助産所開業マニュアル2013. 東京：日本助産師会出版.

日本産科婦人科学会・日本産婦人科医会 (2017). 産婦人科診療ガイドライン—産科編2017. 東京：日本産婦人科学会.

大木秀一 (2017). ふたご手帖 妊娠・出産・育児サポートガイドブック. ふたご手帖プロジェクト.

Pancer, S. M., Pratt, M., Hunsberger, B., Gallant, M. (2000). Thinking ahead: Complexity of expectations and the transition to parenthood. *Journal of Personality*, 68(2), 253-278.

オ木クレイグヒル滋子 (2005). 質的研究方法ゼミナール グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ. 東京：医学書院.

笹田麻由香・岩田銀子・河口明人 (2010). 胎児発育および新生児出生体重に及ぼす妊婦の体重増加に関する研究. 母性衛生, 51(1), 92-98.

Strauss, A., Corbin, J. (1990)/南裕子監訳 (1999). 質的研究の基礎 グラウンデッド・セオリーの技法と手順. 東京：医学書院.

鈴木俊治・大内 望・松橋智彦 (2007). 診療 双胎妊娠の至適体重増加量の検討. 産婦人科の実際, 56(6), 933-937.

横山美江・清水忠彦 (1999). 双胎・品胎妊娠における最適母体体重増加量の検討. 日本公衆衛生雑誌, 46, 604-615.